特集 主題 I : 直腸肛門の性感染症

VII. まとめ
—本邦における STD の概要—

松田 保秀

特定医療法人胃腸科肛門科松田病院

このたびの STD 特集はそれぞれ異なった診療施設での性感染症疾患の実態をまとめていただいた。診療科は肛門科, 泌尿器科, 婦人科, 消化器科など特徴的な科を網羅している。そして思いも拠らぬほど STD が性活動の活発な 20~30 歳代の若者, 特に女性患者に増加し, 深く静かに蔓延している実態が浮き彫りになって驚いている。従来 STD は肛門科に集中しているように思っていたが, 実態は第一線のクリニックでの潜在的な患者の対応が圧倒的に多いようだ。

STD の概要では厚生労働省の性感染症報告によれば, 疾患としては淋菌感染症, 性器クラミジア, 性器ヘルペス, 尖圭コンジローマ, 梅毒, 後天性免疫不全症候群 (HIV 感染, エイズ) が中心である。性器クラミジア, 淋菌感染症が減少傾向を示しているのに対して, 性器ヘルペス, 尖圭コンジローマが増加傾向を示している。

梅毒は全般的に男女とも年々減少傾向にあり, 2001 年からは男性は急激に減りはじめたが, 女性はまだ増減なしである。

後天性免疫不全症候群は全体に増加しているが, 男女差が開いてゆく傾向にある。

ここで, 統計から読み取れることをまとめてみると, ①増加しているのは性器ヘルペス, 尖圭コンジローマと HIV 感染である。②20~30 歳代の若年者においては, クラミジア, 性器ヘルペス, 尖圭コンジローマは女性が多く, それ以後の年齢では男性が多い。③15 歳~20 歳では淋菌感染症以外はすべて女性優位である。

これらの現象の社会的背景を考えると, なによりも 10 歳代女性の性活動の低年齢化, 性行為の多様化, 複数パートナーまたは不特定多数との接触がある。

今回の特集では 21 世紀における新しい性感染症に対する取り組みとして, 具体的には常に複数の性感染症の存在を念頭に入れて精査, 治療すべきであること, さらに難治性の性感染症の奥には常にエイズを疑っておくこと, が大切である。

索引用語: STD, 直腸肛門病変, AIDS, 尖圭コンジローマ, 性器クラミジア, アメーバ赤痢, 梅毒, 淋菌

はじめに

このたびの STD 特集はそれぞれ異なった診療施設での性感染症疾患をまとめていただいたので, 今までにないほど up-date で大変興味のある内容となった。患者の集まる範囲は市中の診療所から大腸肛門病専門病院, さらには公的総合病院における幅広い患者層の中からである。また診療科は肛門科, 泌尿器科, 婦人科, 消化器科など特徴的な科を網羅

している。そして思いも拠らぬほど STD が深く静かに蔓延している実態が浮き彫りになって驚いている。しかも罹患者は性活動の活発な 20~30 歳代の若者に多く, 女性患者の増加が大きな特徴である。この点については稲次が冒頭で述べている。従来 STD は肛門科に集中しているように思えたが, 実態は第一線のクリニックでの潜在的な患者の対応が圧倒的に多いように思われた。それぞれの疾患の特徴も大変興味あるが, ここではまず, 厚生労働省感染症発

生動向調査から疾患の概要を紹介して、次に各著者の論文から各疾患の特徴的な要点、重要点、新しい考え方などを拾い集めてみたい。

1. STD の概要

インターネットによる厚生労働省の性感染症報告によれば、性感染症は1999年から2004年までの定点観測結果がホームページに掲載されている。定点観測施設は1999年の855施設から2004年の916施設に斬増し、一層ネットワークが広がったようである。疾患としては淋菌感染症、性器クラミジア、性器ヘルペス、尖圭コンジローマ、梅毒、後天性免疫不全症候群（HIV感染、エイズ）が中心である。患者数が多い順に疾患別の年次報告数は図1の如くである。性器クラミジア、淋菌感染症が減少傾向を示しているのに対して、性器ヘルペス、尖圭コンジローマが増加傾向を示している。

1) 性器クラミジア：2002年をピークに男女とも減少傾向にあるが、依然として女性の方が多く、性差が広がっている（図2）。年齢では女性は10～20歳代が圧倒的に多く、男性は20～30歳代に多いので

図1 性感染症報告数の年次推移
2004年度 厚生省感染症発生動向調査による（改変）

図2 性器クラミジア感染症の性別罹患率
2004年度 厚生省感染症発生動向調査による（改変）

多少ギャップがある。また、35歳以降では男性の方が多（図3）。

2) 淋菌感染症：圧倒的に男性に多いが、2002年から男女とも減少傾向にある（図4）。年齢は20～30歳代にピークがあり、男女の年齢構成はぴったり一致している（図5）。

3) 性器ヘルペス：年々微増しているが、2004年に男性で減少、傾向を示した。従って男女の乖離が進行している（図6）。年齢構成は男が20歳代から40歳代までが多く60歳以上でまた増加している。一方女性も20歳代から25歳代までが圧倒的に多く、急激に減少して男性と同程度となり、同じく60歳でま

図3 クラミジア感染症の罹患率：年齢別内訳
2004年度 厚生省感染症発生動向調査による（改変）

図4 淋菌感染症の性別罹患率
2004年度 厚生省感染症発生動向調査による（改変）

図5 淋菌感染症の罹患率：年齢別内訳
2004年度 厚生省感染症発生動向調査による（改変）

図6 性器ヘルペスウイルス感染症の性別罹患率
2004年度 厚生省感染症発生動向調査による（改変）

図9 尖圭コンジローマの罹患率：年齢別内訳
2004年度 厚生省感染症発生動向調査による（改変）

図7 性器ヘルペス感染症の罹患率：年齢別内訳
2004年度 厚生省感染症発生動向調査による（改変）

図10 梅毒の性別罹患率
2004年度 厚生省感染症発生動向調査による（改変）

図8 尖圭コンジローマの対罹患率
2004年度 厚生省感染症発生動向調査による（改変）

た増加している（図7）。

4) 尖圭コンジローマ：男女ほぼ同じ割合で急増している（図8）。

年齢別罹患率では、男は30歳代をピークに20歳代から40歳代にかけてドーム状の発生があり、女性は20歳代をピークに30歳代で急激に減少している（図9）。

5) 梅毒：全般的に男女とも年々減少傾向にあり、2001年からは女性は急激に減りはじめたが、男性はほとんど増減なしである（図10）。年齢別構成では男性では20歳代から40歳代が圧倒的に多く、50歳と

60歳でまた多くなっている。女性は20歳代から30歳代で山があり、60歳代で罹患者が一番多くなっている（図11）。

6) 後天性免疫不全症候群：全体に増加しているが、男女差が開いてゆく傾向にある（図12）。

2. STD 最近の傾向

ここで、統計から読み取れることをまとめてみると、①増加しているのは性器ヘルペス、尖圭コンジローマとHIV感染である。②20～30歳代の若年者においては、クラミジア、性器ヘルペス、尖圭コンジローマは女性が多く、それ以後の年齢では男性が多い。③15歳～20歳では淋菌感染症以外はすべて女性優位である。

これらの現象の社会的背景を考えると、まず社会的風潮としての性の解放がある。なによりも10歳代女性の性活動の低年齢化、性行為の多様化、複数パートナーまたは不特定多数との接触がある。また、ピルの解禁によって防御が甘くなっていることも否めない。最終的には大人になってからの不妊治療問題に大いに関係があるように思われてならない。

図11 梅毒の罹患率：年齢別内
2004年度 厚生省感染症発生動向調査による（改変）

図12 後天性免疫不全症候群・梅毒の患者数
2004年度 厚生省感染症発生動向調査による（改変）

3. STD と診療科別特徴

肛門科専門外来（尖圭コンジローマ，性器ヘルペス，梅毒）と泌尿科（淋菌，クラミジア感染症，尖圭コンジローマ，性器ヘルペス，梅毒）・産婦人科外来（淋菌，クラミジア感染症，性器カンジダ症，赤痢アメーバ症，尖圭コンジローマ，性器ヘルペス，梅毒）では，発見されるSTDや扱っているSTDの種類が異なっているのが興味深い。しかし，最近の肛門科では梅毒を診ることはほとんどなくなった。むしろ国民の性に対する変化や国際化などから新しいSTDの形態ができ上がりつつあるように思われる。

今回の特集は21世紀における新しい性感染症に対する取り組みとして，これからの進路を提示していると思う。具体的には常に複数の性感染症の存在を念頭に入れて精査，治療すべきであること。さらに難治性の性感染症の奥には常にエイズを疑っておくことが大切である。なぜなら現在においてはエイズがここまで進展していて，先進国の中で日本だけがHIV感染の防止にブレーキがかかっていないからである。

1) 繁華街の泌尿器科診療所におけるSTDの特徴は，澤村によればクラミジア，淋菌，性器ヘルペス，尖圭コンジローマのうち，男女とも淋菌が最も多かったという。また口腔・咽頭でのSTD検査では淋菌とクラミジア，ブドウ球菌，腸球菌が多かったという。肛門科の黒川は真菌症が最多だったという。

2) 婦人科における性感染症も，藤原によれば赤痢アメーバ，ビールス性疾患が重要となってきた。女性の外性器と肛門の解剖学的位置関係から，帯下の増加による肛門部の性器カンジダ症，肛門性交に

よる赤痢アメーバ症，両者混合の梅毒，性器ヘルペス，尖圭コンジローマがある。性器カンジダ症では腔内のカンジダ保有率が，非妊婦が15%，妊婦が30%と妊婦に多い特徴があるという。赤痢アメーバ症では肛門性交と肛門・唇による感染のためか，圧倒的に男性同性愛者に多く，女性には少ないという。性器ヘルペスでも肛門性交では肛門周囲や直腸粘膜に病変が出現するという。欧米で使用されている尖圭コンジローマの治療薬（imiquimod）が2007年本邦でも市販されるというニュースは注目される。

3) 消化器内科における経験から，大川らはSTDには細菌性赤痢，サルモネラ腸炎，キャンピロバクター腸炎，サイトメガロウイルス腸炎（CMV）などいわゆる感染性大腸炎が含まれるが，STDとして直腸に病変を認めるのはアメーバ性大腸炎，クラミジア直腸炎，梅毒性直腸炎，淋菌性腸炎などが重要という。中でもアメーバ性大腸炎，クラミジア直腸炎は肛門性交などの性行為に直接関わっているため，直腸病変の検索は重要である。

以上，いずれの著者も性感染症は一種類ではなく，エイズをはじめ他の性感染症も合併している可能性を常に念頭に置くことを強調している。

次に肛門疾患手術において，HIV検査は保険で認められていないので，施設によっては自費で検査しているところもあると聞いている。しかし，同じ感染症のHCV，HBV，梅毒は保険で認められているのにHIVだけが認められていないのは不合理である。チェック体制を強化すべき時期が来ていると思われる。

4. HIV 感染症の動向

厚生省の感染症発生動向調査によればHIV感染症と梅毒は一般の性感染症とは別個に扱っている。

HIV陽性とAIDS患者を含むと2005年は1,199人（累計1万1,036人）と過去最高となったという。圧倒的に多いのが男性の同性間感染である。山名は本特集で、男性・同性間は自院例では63%、厚生労働省報告では全年齢を通じて37.6%、15~24歳では80%、25歳~34歳では約76%、50歳以上では36%という。田沼¹⁾によればHIV感染陽性の発見契機として ①急性レトロウイルス症候群 ②日和見疾患 ③性感染症 ④その他（薬剤性など）を挙げている。①では、HIV急性感染の時期では症状として発熱、発疹、咽頭痛、下痢、頭痛などがあるが、特に不明熱は要注意であるという。②ではカリニ肺炎、活動性結核が重要といわれる。最近では老人でもHIVが増えているため老人の結核と、若年者の帯状疱疹がHIV発見に重要である。③では、男性HIV感染者はSTD合併症の中でB型肝炎と梅毒感染がともに70%、クラミジアが60%、HAVが30%、アメーバ赤痢が20%を占めるという（国立国際医療センターエイズ治療・開発センター データ）。特に後の2疾患は経口感染する性感染症なので最近の性行為の行

動変化からも重大である。肛門性交と痔瘻、裂肛、痔核との関連性については山名が自験例での痔瘻については肛門腺の感染・閉塞に関与するかもしれないが、裂肛との関連はなかったと述べている。しかし、機械的な肛門損傷が効率に認められてもよいので、今後はHIV感染者に裂肛病変が増えてくる可能性がある。

おわりに

性感染症は陰部・肛門部ばかりでなく直腸や上部腸管への波及も考慮しなければならない時代になった。同時に感染病原体の進入口となる口腔・咽頭から腸管へのルートも念頭に置かなければならないほど、複雑な感染経路を呈してきた。診療科別のSTDを企画した今回の特集が、各科の医師にとって性感染症診療の新しい幕開けとなれば幸いである。

参考文献

- 1) 田沼順子：HIV感染症 一般外来で遭遇する例とは？ Medical ASAHI 50-53, 2006

A Special Edition

Sexually Transmitted Diseases of the Anus and Rectum

Y. Matsuda

Department of Gastroenterology, Special Medical Corporation Matsuda Hospital, Shizuoka Japan

A special edition on sexually transmitted diseases (STD) of the anus and rectum was planned by a mediator to identify differences of STD among five specific institutes such as rural clinics, speciality coloproctological hospitals, and general hospitals. According to the data of national health care authorities and author's papers, STD has become prevalent among those in their 20s and 30s, especially young women.

In general, recent STDs include gonococcal infection, genital Chlamydia infection, genital herpes, condyloma acuminatum, syphilis, and AIDS. Although gonococcal infection and genital Chlamydia infection have been decreasing in number, genital herpes and condyloma acuminatum have been increasing steadily.

The recent tendency of STD indicates higher prevalence among young women aged 15 to 20 than men, except for gonococcal infection. Further more, not only a single infection but also double or triple infections are characteristic. STD has extended not only to the genito-anal region but also the oral cavity and pharyngeal site, so the upper or lower digestive tract should be investigated hereafter.

（依頼原稿）